リンガフランカから単一言語話者の母語への影響による言語変化について
ーウズベキスタンのロシア語リンガフランカとロシア語単一話者を題材にー

柳 田 賢 二

はじめに

隣接の諸言語が系統にかかわらず互いに似てくることを意味する「言語同盟」という現象の存在は言語学においてよく知られている。しかし，もし通じもしない言語が単一言語話者の母語に影響を及ぼすことがあるとすれば，それはいかなるプロセスを通じて起こるのだろうか。現在のウズベキスタンのロシア語単一話者のロシア語において起こっている現象はこの問いに対する答えの一つであり，同時に「言語同盟」という一見不可思議な現象を論ずるにあたって必要な視座を示してくれるものでもある。

1. リンガフランカとそれに対する言語調査について

本稿では多民族・多言語社会での日常生活において民族間共用の口頭言語として話されている言語を「リンガフランカ」と呼ぶ。

一つの社会に複数のリンガフランカが存在することも十分にあり得る。現に，現在のタシケントではロシア語とウズベク語，サマルカンドではロシア語とタジク語がリンガフランカとして用いられている。しかし，いずれの都市においても，ロシア人やウクライナ人をはじめとする「ヨーロッパ系」民族の人々のほとんどがロシア語しか話さない。[1]

筆者が 2018 年までにタシケントとサマルカンドで面談した限りでは，ロシア人やウクライナ人を含む「ヨーロッパ系民族」の場合，高校生や中学生のインフォーマン

[1] ウズベキスタンのウズベク人やタジク人やカザフ人が日本人に話しかける際に使う言語はロシア語である。それは，ウズベキスタン政府がいかにロシア語教育を縮小して英語教育の強化に努めようと，英語は誰にとっても異質な「完全な外国語」であり続けているのに対し，ロシア語は現時点においても「完全な外国語」ではなくリンガフランカであり続けているからである。日本人のようにウズベク語もタジク語も通じるはずのないことが外見上明らかな者には，ロシア語で話しかける他に選択肢がないからなのである。

トでさえ「ウズベク語もタジク語も話せない」という返答以外得たことがない。[2]

ウズベキスタンにおけるロシア語単一言語話者のロシア語に関する研究は，現地における上述のような現状を踏まえた上でなされねばならない。もしあるインフォーマントが完全なロシア語単一話者であったとしても，彼／彼女が日常的に話す相手の多くがロシア人ではなく現地民族の人々である以上は，そうした非ロシア語母語話者が話すリンガフランカとしてのロシア語に特有の特徴が彼／彼女のロシア語に入り込んでいることが十分にあり得るのである。そして，そうした社会における口頭言語の調査において最も重要なのは，そうした特徴がロシア語単一話者にとってどの程度「許容しうる」と考えられているか，あるいはさらに進んで「そう言うのが当然」などと考えられるに至っているのかということである。

また，インフォーマントの答えについては，ある語形や例文を聞かせ，それについてどう思うか尋ねた場合には，その答えをそのまま信じてはならない。「私自身が日常生活でいつもそう言っている。何かおかしいのか？」といった反応だけは別として，ある例文に対して「そうは言わない」と答えたインフォーマントが，同じ日の自然会話中でまさしくそこで問題にされていたのと同じ音やシンタクス手段を用いることがあり得るということを，筆者はこれまでにたびたび経験している。

2. 多言語社会におけるバイリンガリズム，コードスイッチング，リンガフランカの関係

2-1. ウズベキスタンの多言語社会について

ウズベキスタンに限らず中央アジアでは 2〜4 程度の言語を日常的に話しているのが普通であり，「国民みんなが同じ一つの言語を知っていて，国民のほとんどがその一つの言語しか話さない国」などというものは，一般人にとって想定することすら難しい。[3] この点において，中央アジアは我が国の対極にある。しかし，ピーター・トラッ

[2] 筆者は 2007 年以来現在まで毎年 2〜3 週間ウズベキスタンでの滞在を重ねてきたが，現地民族のコーディネーターやインフォーマントから「ウズベク語を自在に話すロシア人」に会ったという話を聞いた経験が 2 回だけある。しかしいずれの場合も筆者自身が当人と会うことはできぬまま終わり，筆者自身がそうしたロシア人に会ったことはこれまでに一度もない。現地民族の人々が自分から筆者に「ウズベク語を自在に話すロシア人」の存在を知らせてくれることはそうしたロシア人が増えていることを示すのではなく，逆にそうした人々が未だ稀有な存在であり，賞賛の対象であることの証しであると解釈すべきであろう。

[3] 筆者は 2007 年 9 月に，ウズベキスタンの隣国であるキルギスの首都ビシュケクのキルギス国立大学（旧ソ連国立フルンゼ総合大学）の学部 1 年生向け日本語初級クラスを訪問したことがある。担当のキルギス人日本語講師から日本について短い話をしてくれるよう頼まれたので，その冒頭でこういう国を知っているかロシア語で尋ねたところ数名の学生はすぐに元気よく

ドギルがルクセンブルク，パラグァイ，ウガンダの多言語使用を描写した上で，ウガンダの首都カンパラにおける社会的「場面」による複雑極まりない言語切り替えについて「多言語使用社会というのは非常によくあることで，世界全体から見るならば，ウガンダのような状態は，例外というよりはむしろ普通のことなのである」と言うように,[4] これは世界にいくらでもある現象であり，珍しいことではない。

そして，ウズベキスタンだけとってみても，人々の言語レパートリーには生育地，居住地，世代，民族，学歴，職業といった様々な要因により大きなばらつきがある。これまでに筆者自身が言語使用の場面を目撃したものと，現地のロシア語系住民に尋ねて知ったものだけを挙げても次の如くである。

—ウズベキスタンの人々の言語レパートリーの例—

- ウズベク語，ロシア語（例：タシケントのウズベク人）
- カザフ語，ウズベク語，ロシア語（例：タシケントのカザフ人）
- タジク語，ウズベク語，ロシア語（例：サマルカンドのタジク人，ウズベク人）
- 朝鮮語，ロシア語（例：タシケントの朝鮮人（自称は「高麗人」）のうち，1937年の極東からの強制移住の2世）
- タタール語，ロシア語（タタール人の一部）
- タタール語，ロシア語，ウズベク語（タタール人の一部）
- ロシア語のみ（ロシア人ほか「ヨーロッパ系」住民，タシケントの朝鮮人3世以降，タタール人の一部）
- ウズベク語のみ（フェルガナ州の農村出身でひどく貧弱なロシア語教育しか受けられなかった若いウズベク人）

etc.

また，タシケントとサマルカンドだけをとってみても自らを「ウイグル人」，「イラン人」，「トルコ人」，「アゼルバイジャン人」，「アルメニア人」，「トゥルクメン人」，「アフガン人」，「ドゥンガン人」，「ギリシャ人」等々と称する者に会うのは珍しいことではない。

「知りません」と答えたが，それ以外の学生は「そんなことは考えたこともない」と言わんばかりの当惑の表情を浮かべた。筆者がこの質問をしたのはこうした反応を予期していたからなので「日本がそういう国です。ついでに言えば隣の韓国もそうです。しかし中国は多民族国家なので違います」と話した。

[4] P.トラッドギル（土田滋訳）『言語と社会』岩波書店，1980年，140-141頁, 142-147頁, 149頁。

2-2. 多言語社会の住民の「母語」について

多言語社会で暮らす人々に言及する場合には,「母語（родной язык）」という語を用いることに極めて慎重になる必要がある。その端的な例として，ロシアのヨーロッパ部から移住してきたタタール人の 3 世以降が挙げられる。現在のウズベキスタンの都市部ではタタール人に出会うことが非常に多く，その一部は筆者にとって外見上ロシア人と見分けが付かない。ところがタタール人についてはたとえ同じ都市に住み，同じ年代であったとしてもタタール語の能力に非常に大きなばらつきがある。

そして，現に筆者がこれまでに出会ったさして多からぬ数のタタール人のうちには，ロシア語で教える学校に通ったにもかかわらず「タタール語が自在に話せる」と明言する者もいれば，タシケントの大学を卒業し 2005 年 4 月に来日して日本の大学の博士前期課程に入学したばかりなのに流暢な日本語で「小学校から大学まで全てロシア語で教える学校に通い，現在も生活は全てロシア語なので私の母語はロシア語です」と言いながら，同年 8 月に帰省先のタシケントで会った時の話では「祖母はロシア語が話せないので祖母と話す時だけはタタール語で話します」と言って矛盾を感じない様子のカザンタタール人女性 Хаматова 氏（仮名）もいた。後者は本稿執筆時の 2019 年に日本国内に居住していたので同年 7 月 16 日に電話で詳しく尋ねて知ったことを要約すると「1982 年タシケント市生まれ。大学 3 年時に日本に半年間留学した以外は小学校から大学卒業まで全てタシケント市内で暮らした。妹が 1 人いる。5 歳までは両親のほか祖母も同居していた。祖母とはその後もしばしば会って話をし，大学生の時に再び 1 年間同居した。祖父母がロシアから移住してきたので自分は 3 世である。両親ともウズベキスタン生まれのカザンタタール人だが，いずれもロシア語の学校へ通ったためロシア語の方が得意である。しかし祖母はロシア語ができないので，幼少時の家庭内ではタタール語とロシア語が入り混じっていた。幼少時にはウズベク人の多い地区に住んでいたがタタール語とウズベク語は似ているので近所のウズベク人の子供たちとウズベク語で話して遊んでいた。」とのことである。

これとは逆の極端な例を挙げると，タシケントの若年インフォーマントのうちには「タタール語は本当にあいさつの 1 語しか知らない。話せるのはロシア語だけだ」と言い，実際に学校でも家庭でもロシア語しか話していないだけでなく，言語に関するインフォーマントとして受けているインタビューの中で「カザンタタールかクリミアタタールか」と尋ねられると「カザンタタールだ」と答え，すぐに「言い間違った。クリミアタタールだ」と訂正するかと思えば，30 分以上も経ってからまたもや「先ほど間違ったことを言ってしまった。やはりクリミアタタールではなくカザンタタール

だ」と訂正するなど自己の属性の認識すら曖昧な女子高校生（1998 年タシケント生まれ。学校も全てタシケント市内。両親のほか祖父母の全員がウズベキスタン出身）もいた。

上出の Хаматова 氏のように，幼少期に聞いて育った言語がタタール語とロシア語の両方だったという場合には両方とも「母語」であると考えることが可能であり，またそう考えるほかないと言わざるを得ない。

上出の 1998 年生まれの女子高校生の場合は，たとえ民族籍がタタール人であったしてもロシア語を「母語」とする者であり,「ロシア語単一話者」であると認めざるを得ない。

2-3. ウズベキスタンにおけるバイリンガリズム[5] の実態

ここに掲げる例は,筆者自身が 2002 年にタシケント州の旧コルホーズ«Политотдел»で録画した 2 名の朝鮮人（自称は「高麗人」）2 世の男性の会話である。この 2 名はいずれも極東で生まれたが，乳児期の 1937 年にスターリンの命により突然家族ごと中央アジアに移住させられ，全ての教育をロシア語で受けた竹馬の友である。[6]

[5] 社会言語学においては bilingualism という語は 3 言語以上を使う場合にも用いられる。また中央アジアでは 4 つ以上の言語を話す人も珍しくないが，そうした人々もみな社会言語学では bilingual と呼ばれ得る。本稿ではこれらに対応する日本語の術語として「バイリンガリズム」，「バイリンガル」という語を用いる。

[6] 筆者はこの日にビデオ録画したこの両名の会話の大部分とその日本語訳を柳田賢二「タシケント郊外旧コルホーズ「ポリトオッジェル」在住高麗人 2 世の朝鮮語・ロシア語 113 混用コードについて」『東北アジア研究』（東北大学東北アジア研究センター）第 9 号，2005 年，111-142 頁のうち-129 頁に掲載し，さらに後年ここに例示したのと同じ部分を朝鮮語・ロシア語コードスイッチングの好例として柳田賢二「ピジン・クレオール言語とコードスイッチングおよび中央アジアのリングァフランカとしてのロシア語について」『東北アジア研究』（東北大学東北アジア研究センター）第 13 号，2009 年，29-56 頁のうち 43 頁に引用したので，ここではスペースを節約するために活字を極力小さくして図として掲載した。

ウズベキスタン高麗人2世によるロシア語・朝鮮語コードスイッチングの例

- (キム) Училище.
- (パク) Это Хореографический институт на базе бывшего Института культуры. Она лучшее образование имеет хореографическое. 그래, Анна фамилия —Тхай, 서이Тхай, 그래.
- (キム) 태, 태가.
- (パク) 태, да? 노새, 그거, 씅거는 타이라 하지. Вообще 타이라 하는 게 없지, да? Такой корейский. 그래, 이, 아주 그 새아기ㄴ스물두 살, 애Анне. Возраст — двадцать два года наверное, 아즉 시집두 아이 갔소. 그 아이 такая хорошо танцует. Она танцевщица корейской танцевальной ансамбль「고려」우리 Ассоциации корейского культурного центра. Есть ансамбль, танцевальный ансамбль「고려」называется. Руководитель — Тен Марина 라구. 그래 그, Тен Марина, руководя, она нам посоветовала Анну, и «Политотдел» засадил, участвовала в «Жемчужине». 그래서 삼월달부터, 올해 삼월달부터 она начала учить детей, восстанавливать. 그래, 우리 어, 새해, 그럴 때두 выступала 어그네 오월달, да? 단오, 오월달에두 они в танец свера два японских танца.

日本語訳

- （キム）（それは大学ではなくて）専門学校だよ。
- （パク）あれは前の文化大学を基盤にして作った舞踊大学なんだよ,
彼女は舞踊の一番良い教育を受けているんだ。それで、アンナの苗
はTkhai、姓がTkhaiっていうんだ。そうだ。
- （キム）テ、テという苗字だよ。
- （パク）テというのか？ ロシア語では、それは、書くときはタイと
るじゃないか。 一般にタイというのはないよね？ そういう朝鮮語
- それで、その、非常に若い子、22歳だ、そのアンナは。たしか年
歳だ。まだ嫁にも行っていないんだ。その子が踊りがすごく上手し
だ。彼女は、我々の高麗人文化センター協会の「高麗」という朝鮮
踊アンサンブルのダンサーなんだ。アンサンブル、舞踊アンサンブ
があって、「高麗」という名前だ。指導者は、テン・マリーナとい
んだ。それでその、テン・マリーナが指導していて、その人が我々
アンナを推薦して、「ポリトオッジェル」が採用して、（アンナが
「ジェムチュージナ」（民族舞踊グループの名。「真珠」の意）に
加したんだ。それで三月から、今年の三月から子供を教えて再建し
めたんだ。それで我々の、えーと、正月とかそういう時にも、いつ
だったか五月に出演していたよね？端午、五月にも彼らは踊りにE
の踊りを2つ紹介してくれたんだ。

これは朝鮮語でなした質問に対する答えから始まった会話の例であるが，この両名はロシア語だけで話そうとする時であっても形態論とシンタクスの両面において非規範ロシア語的現象が頻出する。しかし，それにもかかわらず，意外なことにこのような甚だしい朝鮮語・ロシア語間コードスイッチングを伴うパロールにおいてさえ驚くほどロシア語の発音が良く，ロシア語を学んでいる韓国人学生に見られる朝鮮語訛りは極めて稀にしか現れない。また朝鮮語について言えば，彼らの話し言葉が北朝鮮の咸鏡北道方言に由来するため語彙面で韓国標準語とはかなり異なるものの，朝鮮語のシンタクスをよく保存している。また音韻面では破裂音一般において，例えば[t^h]と[ˀt]と[t]が相互に弁別的対立を成すため別音素/t^h/，/ˀt/，/d/を構成する一方で[t]と[d]が同じ音素の異音であって相補分布を成し，入れ替えても語の意味に変化はないことから母語話者にはその違いが認識されない[7] など，ロシア語と非常に大きく異なる朝鮮語の音素体系を極めてよく保存しており，こうしたコードスイッチングをする際には 2 つの言語の音韻体系の間を頻繁に行き来しているのだとしか考えられない。[8]

上出の Хаматова 氏はウズベキスタンにおけるタタール人 3 世であり，結局，上掲の高麗人 2 世やその子供である 3 世たちと同じくコードスイッチング言語を母語とし

[7] 例えば，[t^ha˩˧] /t^hal/「仮面」，[ˀta˩˧] / ˀtal/「娘」，[ta˩˧] /dal/「(暦上及び天体の)月」が区別されるに対し，[i ta˩˧] /i dal/と[ida˩˧] /idal/はいずれも「この月，今月」を意味する。（注：朝鮮語では[l]類と[r]類の音は同じ音素の位置的異音という関係にあり弁別的対立を成さない。この音素は/ r /と表記されることもあるが，ここに挙げた例では無用の誤解を避けるため/ l /と表記した。）

[8] ここで IPA 表記と音素表記をせずにキリル字とハングルで表記したのは，もしそうしたとしても結局のところ上掲の文字表記を２つの言語の音素記号が入り組んだ極めて分かりにくい音素表記に変換したものと同じになってしまうに過ぎず，何らの利点もないからである。

ていたということになる。現に筆者の観察した範囲では，«Политотдел»の高麗人 3 世たちは 2 世である親たちの話すコードスイッチング言語を理解していたが，自らが筆者らに話す際にはロシア語のみとなっていた。

つまり，この Хаматова 氏と«Политотдел»の高麗人（朝鮮人）3 世たちとの最大の違いとは，コードスイッチングがロシア語－朝鮮語という 2 言語間のみであるか，ロシア語－タタール語の 2 言語にタタール語と同系でかなりの程度相互理解が可能なウズベク語が加わるかという点に過ぎないということになる。

実際の多言語社会とは，«Политотдел»の高麗人 2 世と 3 世や Хаматова 氏が行っているような言語間コードスイッチングを日常的に行わざるを得ない社会にほかならない。そして，実際のバイリンガル（“bilingual”）とは，実は，言語間コードスイッチングを日常的に行っている人々に過ぎないのである。

筆者は，2014 年 1 月 1 日にタシケント－ソウル間の機内で隣席の女性（韓国の税関申告書を書くためにパスポートを開いた際に見えたところでは生年は 1967 年）と，ロシア語で次のような内容の会話をしたことがある。

隣席の女性 :（筆者が乗務員に「私は韓国の税関申告書は要りません。ソウルで日本行きの飛行機に乗り換えをするだけなので。」とロシア語で言うのを見て）「あなたは日本人なのにロシア語を話すのですか。」
筆者 :「ええ話します。ロシア語の教師なので。あなたはサマルカンドの方ですか。[9]」
隣席の女性 :「いいえ，ブハラです。私はタジク人なのでタジク語とウズベク語とロシア語を話します。私は月に 1 回かそれ以上タシケントとソウルの間を行き来しています。だから朝鮮語も少し話します。全部で 4 言語です。」
筆者 :「なぜそんなに頻繁にソウルへ行かれるのですか。」
隣席の女性 :「衣服の貿易をしているからです。」

この会話は，この女性が上記会話文中の下線部を明らかに«Я хожу между Ташкентом и Сеулом раз в месяц или больше.»と表現したため，特に強く筆者の記憶に残っているのである。タシケントとソウルは極めて遠く離れていて徒歩での頻繁な往復など絶対に不可能であり，しかも現に飛行機の中にいるという状況において，両都市間の往復を表すために動詞 ходить を用いることが，標準ロシア語の規範に照らし許容されるは

[9] 筆者がこの問いを発したのはこの女性が離陸前の長い時間携帯電話で話しており，同国ではサマルカンドの方言語彙として有名な間投詞«хай»「はい」を頻繁に用いていたからである。この«хай»については後に触れる。

ずはない。

また，この航路の航空機では出稼ぎ先である韓国と故郷を往復する中年以下のウズベキスタン人乗客に遭うことが多いが，そうした人々が筆者に向けて話すのは多くの場合極めて拙いロシア語であり，筆者がロシア語で返答すると，たとえば「ロシア語をとてもよくご存じなのですね。」の意味で«Вы очень хорошо знаете по-русски!»などという日本人学習者がするのと同種の素朴な誤文を発することが頻繁にある。

バイリンガルが母語でない言語を話す場合にはこのように重大な誤りが現れることもあり得るが，それをそのまま押し通すということに過ぎないのである。

結局，バイリンガルたちの言語行動と日本の大学の学生や教員のそれとの間に本質的な違いはないと言っても過言ではない。

先出の高麗人 2 世の子供世代である 3 世の多くは能動的に朝鮮語を使うことができないので，高麗人 2 世によるこの甚だしいコードスイッチングの例は，確かに日常言語が 1 世の朝鮮語から 3 世のロシア語へと全面的に置き換えられる過渡期の現象であると言うことができる。しかし，言語間コードスイッチングとはこのような過渡期に限って現れる現象ではない。Carol Myers-Scotten が正しく指摘したように,[10] 言語間コードスイッチングを含む会話というものは，一般人の信じるところとは違って，主に優勢言語がある言語から別の言語に替わる際の移行段階に限って現れるというものではない。この中央アジア高麗人 2 世およびその子供世代である 3 世のほか，ロシア語を「母語」と考えながら実はタタール語が話せる Хаматова 氏とその両親である 2 世のように，使用言語が交替の途上にある移民の多くがコードスイッチングを行うということは確かに事実であるが，言語間コードスイッチングを含む会話とは多くの「固定的」バイリンガルの日常生活の一部である。そして，このことは中央アジアにも完全に妥当するのである。

例えば 1971 年タシケント生まれの男性で，学校教育と工学部での大学教育を全てタシケントで受けたウズベク人である，筆者の現地調査コーディネーターАхмедов 氏（仮名。フリーランス日本語-ウズベク語-ロシア語通訳。現在，妻および 2018 年現在小学生の娘 1 人，息子 1 人と同居）は両親ともウズベク人であるが，本人もその姉（大学教員。現在，実母および娘 2 人と同居）も全ての学校教育をロシア語で受けたため，書き言葉はむしろウズベク語よりもロシア語の方が得意であるのみならず，話し言葉についても，周囲のロシア語系住民たちから「ロシア人と全く同様にロシア語を話す」

[10] C. Myers-Scotten, *Social motivations for codeswitching : Evidence from Africa*, (Oxford: Clarendon Press, 1993), p. 1 参照

と言われている。そしてこの姉弟の子供たち 4 名（姉の長女は 2018 年現在高校生，他 3 名は小学生）も全員がロシア語で教える学校へ通っており，筆者は彼らが年を追ってロシア人のロシア語に近い言葉を話すようになっていくのをこれまでに観察してきた。現在ではいとこ間の会話も，少なくとも筆者のいる場ではロシア語である。しかし姉の家には医科大学 3 年次以降の教育のみをロシア語で受け，長く医師として働いていた実母が同居している。この実母はインテリであるが，小学校から医大の 2 年次に至るまでの教育をウズベク語で受け，また医師としての診療においても主にウズベク語を用いていたため，会話ではウズベク語の方が得意である。

また Ахмедов 氏の妻（ウズベク人，1984 年フェルガナ州生まれ，2004 年フェルガナ国立大学文学部ウズベク語学専攻卒業，2007 年同大学大学院修士課程言語学専攻修了）はフェルガナ州の農村出身であるためウズベク語で教える学校しかなく，しかも極めて貧弱なロシア語教育しか受けられなかった。そのため，高い知能を持ち大学院でチュルク語学を研究してロシア語で書かれたチュルク語学の専門書を読むことができ，ソ連時代のロシア語の映画を理解できるにもかかわらず，2009 年の結婚当初には能動的にロシア語を発することにかなりの困難があった。しかし驚いたことにこの女性は 2010 年生まれの長女と 2013 年生まれの長男を育てながら自らのロシア語運用能力も高めていき，2018 年訪問時には Ахмедов 氏および筆者と長時間ロシア語だけで会話することに全く問題がないほどまでに習熟していた。そしてこの時には，少なくとも筆者が聞こえる範囲にいる時には子供たちとの会話もロシア語となっていた。

しかし，この Ахмедов 氏一家はウズベキスタンの首都のウズベク人やウイグル人の多い地区に住んでおり，しかも Ахмедов 氏の妻の親族にはフェルガナ州での貧弱な教育ゆえにロシア語が苦手な者が多いため，この一家の誰にとってもウズベク語で話す必要が生活上しばしば発生する。また Ахмедов 氏の姉の家では元医師の祖母が娘や孫たちに向かって話す際にはほぼウズベク語で話す。それゆえ Ахмедов 氏とその姉の子供たち 4 名は全員がウズベク語・ロシア語バイリンガルとして成長しつつある。

またサマルカンド市に言及するならば，まずロシア語系住民を除く現地諸民族のリンガフランカがタジク語であることを指摘しなければならない。サマルカンドやブハラのタジク人はタジク人というアイデンティティを持ちタジク語を保存しているが，政治的な理由でほとんどの人がパスポート上の民族籍を「ウズベク人」としている。しかしこの両都市には民族籍だけでなく実際にウズベク人である人々も，タジク人より少ないが住んでいる。そして，少なくともサマルカンドのタジク人とウズベク人は民族間共用語として主にタジク語を話すがウズベク語も話し，それらが通じないロシア

語系住民や外国人に向かって話す場合にはロシア語で話すのである。

少なくとも中央アジアにおいては，実際のバイリンガルとはそのほとんどが「“話者の特性” および／または “発話の行われる場面”」によって複数の言語の間を揺れ動く人々に過ぎない。[11] そして，ここでいう“発話の行われる場面”には「話し相手がどういう人であるか」も含まれる。話し相手がロシア人である場合に限らず完全な外国人である場合であってもロシア語を話すが，これは脚注 1 で述べた通り唯一のリンガフランカであるロシア語で話しかけるということに過ぎない。また逆に，その場にいる第三者に理解されたくない会話をする際に（いわゆる“secret language”として）わざと小刻みなコードスイッチングをすることもある。[12]

単一言語社会に住む日本人には理解しにくいことだが，こうした実際のバイリンガルたちの言語レパートリーのうちにロシア語リンガフランカを算入して考えない限り，彼らの言語行動を説明することは不可能である。そしてこのロシア語リンガフランカとは，それがロシア語の方言であることは一瞬聞いただけで明らかであるだけでなく，例えばモスクワのロシア人との間での相互理解においても支障を来さないが，もしロシアにおける標準ロシア語を「規範的ロシア語」と定義した場合には合規範的表現として許容されず，「初級文法上の誤り」とされるような表現（パロール）をも「許容範囲にある表現」ないし「当然の表現」として認めてしまうような，柔軟かつ可塑的な言語（ラング）なのである。

そしてこのことはとりわけ重要である。なぜなら，もし中央アジアのどこかの都市にロシア語単一話者のみの家庭に生まれた子供がいたとすると，その子供が言語形成期に住んでいる土地の言語環境（языковая среда）が上述のような内容のバイリンガリズムである場合には，たとえその子供がロシア語で教える学校へ行ったとしてもその話し相手の多くは中央アジアの現地民族の人々であり，少なくとも民族語に加えてロシア語リンガフランカを話すバイリンガルであるからである。つまり，ロシア語リンガフランカがロシア語母語話者の単一言語を取り囲むため，前者が後者に影響を与えることが必至だからである。

---

[11] 筆者は以前，2005 年の前掲論文の 131 頁において朝鮮語・ロシア語コードスイッチング言語を常用している«Политотдел»の高麗人 2 世のバイリンガルについてこれと同じ定義をしたが，その後ウズベク人，タジク人，タタール人，カザフ人，キルギス人，ドゥンガン人等々の人々の言語使用を観察した結果，少なくとも中央アジアのバイリンガルたちについては民族および母語の如何を問わずこうした定義が妥当すると考えるに至った。

[12] このことゆえに，同国を含め中央アジアでは日本の言語事情を知らない現地人の前で日本語を話す際には，何らかの知られたくない秘密があるのではないかと疑われてしまうことがあるので，それを避けるための配慮が必要である。

3. ロシア語リンガフランカからロシア語単一話者のロシア語への影響について

3-1. 「中央アジアロシア語」とその地域的変種の発生原因について

ところが，少なくともウズベキスタンのロシア語単一話者（つまりロシア語系住民）のロシア語が，筆者のようにソ連時代にロシア語を学んだ外国人に与える印象とは，初めて聞いた場合には「驚くほどソ連時代に外国人に教えられていた標準ロシア語に近く，理解しやすい」というものである。そして，これに慣れてしまうとモスクワのロシア人の言葉が何ともがさつで無愛想に聞こえる。[13]

ところが，これはあくまでも「細かな点に注意を払わない限りは」のことであって，ウズベキスタンのロシア語単一話者のロシア語にも，ロシア語の他の地域方言と同様に一定の特徴がある。そして，この特徴のうちの大部分は，ウズベキスタンに限らずキルギスのビシュケクでもカザフスタンの旧首都アルマトゥでも見られるのである。そうした特徴を共有するロシア語諸方言を「中央アジアロシア語」と呼ぶことに問題はないであろう。

但し，例えば日本語の関東方言内部での差異と中央アジアロシア語内での差異との間には，それを発生せしめた要因に極めて重大な違いが存在する。それはつまり，後者の差異の発生には，全く系統的に異なりロシア語とは相互理解不可能な言語を母語とするバイリンガル話者の話すリンガフランカの影響が明らかに見て取れるのに対し，前者においては少なくとも日本語以外の言語が差異の発生に影響した可能性はないということである。

3-2. サマルカンドにおける実例

次に掲げるのは2013年9月にサマルカンド市で面談した学校教師の女性Черных氏（仮名。ロシア人だがサマルカンド州の村出身。市内で年上のはとこの女性と暮らす。小学校低学年担当。当時25歳だが訪露歴なし）の話の要約である。

> 「私の弟がサンクトペテルブルグへ行って働いているんですが，帰省するたびに私たちの言葉を訛り（акцент）などと呼び『ペテルブルグではそうは言わない』

[13] こうした感想が，ウズベキスタンのロシア語系住民自身による自らの言語に対する認識と一致するのはとりわけ興味深いことである。後者については帯谷知可[編著]『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店，2018年，223-226頁に数件の実例が挙げられている。

と言って直そうとします。例えば，私たちは Да, Хорошо, Ладно の意味で «Хай»[14, 15] と言いますが，あそこではそう言わないぞと言うんです。また，ロシアでは年上と年下との брат, сестра を区別しませんが，私たちの話し言葉では年下を братишка, сестрёнка と言い，年上を брат, сестра と呼んで区別しています。」

明らかに当該言語社会の標準語の規範に反し，出現当初は強い反感を感じた音や形式やシンタクス手段であっても，それを頻繁に聞くようになるにつれ抵抗感が減り，さらに大多数の人々がそれを使うようになれば「それも正しい」ないし「その方がより正しい」と感じられるようになるという現象は，現代日本語の話し言葉でも繰り返し起きている。[16]

音形と意味の双方が偶然日本語「はい」に非常に近いため日本人の印象に残りやすい間投詞 «Хай» がサマルカンドやブハラのタジク人やウズベク人の間で普通に用いられているのだが，ここで注目すべきことの第一点は，この間投詞 «Хай» が彼らのロシア語リンガフランカに入り込み，そこからさらに同地のロシア語単一話者の話し言葉にまで入り込んで完全に日常語化しているということである。第二点についてはより慎重に考える必要があるので次節で論ずる。

3-3. ロシア語単一話者における「兄 vs 弟，姉 vs 妹」の区別の発生

---

[14] サマルカンドのロシア語系住民とロシア語についての話をすると，自分たちのロシア語の特徴としてまず«Хай»の使用を挙げるのが普通であるが，«Нет»の意味で別の語を用いるという話はこれまで耳にしたことがない。

[15] *Академия наук Узбекской ССР, Ордена «Знак почета» Институт языка и литературы им. А.С. Пушкина.* Узбекско-русский словарь / Под ред. С.Ф. Акобирова и Г.Н. Михайлова. Ташкент, 1988, С. 512 にはこの «хай» が「会話語」として掲載されており，добро, благо, благодеяние 等を第１義とする «хайр» という語の第３義と同義とされている。そしてこの第３義は助詞（частица）としての用法であり，«хорошо, ладно, ну ладно» という意味が記載されている。しかしこのことをもってこの語がウズベク語から同地のタジク語リンガフランカに流入したと断ずることはできない。ウズベク語とタジク語は系統的に異なってもその話し手たちは 1500 年ほども前から隣接し，同じ宗教を信じ，似通った経済的・文化的条件で暮らしてきたため，語彙のみならず文法面や音韻面においてさえ相互に影響し合っており，共通語彙も非常に多いからである。（*Ганиев Ж. В.* Контрастивная фонетика русского языка в сопоставлении с узбекским и таджикским языками. Учебное пособие. М., 2015. С. 23-24 を参照。）実際，2019 年 9 月に上出の Ахмедов 氏の妻（フェルガナ国立大学大学院修士課程でチュルク語学を専攻し，アラビア文字を知っている。敬虔なイスラム教徒でもある。）に尋ねたところ，「«хайр»ならばアラビア語の単語だ」とのことであった。

[16] 端的な例として「語中でのガ行鼻濁音の不使用」,「母音オの非円唇化」,「まじで」（＝本気で，真剣に）,「このチャンネルでは報道番組が見れない」等を挙げることができるであろう。

ウズベク語はチュルク語族の言語であり，タジク語は印欧語族イラン語派の言語である。しかし，兄／弟，姉／妹はこのいずれにおいても次のように区別されている。[17]

「兄」はウズベク語では ака，タジク語では бародар, ака
「弟」はウズベク語では ука，タジク語では додар, ука
「姉」はウズベク語では опа，タジク語では хоҳар, ҳамшира
「妹」はウズベク語では сингил，タジク語では хоҳари хурд

このタジク語はソ連末期のタジク共和国科学アカデミーが編纂した露-タジク語辞典から採ったものであるため，タジキスタンにおいて通用する形であることを疑う必要はないが，サマルカンドのタジク人たちによれば，タジキスタンのタジク語とサマルカンドのタジク語の間は相互理解可能であるとはいえかなり異なるとのことである。サマルカンドとドゥシャンベの間には高い山があり交通が不便なので，方言差が大きいのも当然である。[18]

またウズベク語も方言差の大きな言語であり，筆者がこれまでにウズベク人から聞いた範囲でも標準ウズベク語，タシケント方言，サマルカンド方言はそれぞれかなり異なるとのことである。

ウズベク語とタジク語の関係については注 15 で触れたが，「兄弟姉妹」の親族名称については一方から他方への語彙借用があったことが明らかであるだけでなく，そのいずれにも年上と年下とを区別しない英語 brother, sister のような語が存在しないことが伺える。

ウズベク人 Ахмедов 氏やタタール人 Хаматова 氏のような人々が話すロシア語であっても，日本人のロシア語教師が音韻面やシンタクス面に特に注目して観察すれば彼らのパロールにロシア出身の同世代のロシア語にはない特徴が存在することが分かる。しかし братишка と сестрёнка という語はロシアにおいて「口語」としてではあれ標準ロシア語の辞書に載っている語である。それゆえ筆者も братишка と сестрёнка という語がタシケントの口語ロシア語では単に「弟」と「妹」の意味で用いられている可能

[17] ここに挙げたキリル字表記は，ウズベク語については *Академия наук Узбекской ССР.* Узбекско-русский словарь（前注 15 参照），タジク語については *Академия наук Таджикской ССР, Институт языка и литературы имени Рудаки.* Русско-таджикский словарь / Под ред. М.С. Асимова. М., 1985 にある綴りに依った。

[18] 本来ならばここでウズベク語と同じ言語社会で話されているウズベキスタン国内のサマルカンドかブハラのタジク語方言の例を示すべきであるが，そうした方言の辞書は存在すら不明なので，ここではやむなくタジキスタンで用いられている形を示す。

性に気付くまでにしばらく時間を要した。その後ロシア語母語話者のインフォーマントらとの会話でもなるべく家族構成に言及するよう仕向けたところ，ウズベク人やタジク人だけでなくロシア語母語話者であっても全員が妹を сестрёнка と呼び，братик という語を用いた 1 名以外の全員が弟を братишка と呼んでいることが分かった。[19] さらに上出の Черных 氏にも確かめたところ，要約の文中にもある通りサマルカンドでも同様であることが分かった。

もし「弟」と「妹」（ウズベク語の ука と сингил）を指すのに братишка と сестрёнка を用いることが義務的になれば，брат と сестра の意味が狭まるのは当然のことである。そして実際に，現在のタシケントの口語ロシア語では брат と сестра はほぼ「兄」と「姉」（ウズベク語の ака と опа）[20] という意味でしか用いられなくなっている。[21] つまり，地元の人々同士の会話では，年長か年少かを示したい場合であっても «старший брат»，«старшая сестра» と言わず «брат» と «сестра» で済ませてしまうのである。

ここで注目すべきことの第一は，背後にチュルク系やイラン系の言語が隠れており言語接触の結果であることが明らかであるにもかかわらず，形式面では何らの変化もないまま брат と сестра という基礎語彙の意味に「年長の」という意味が付け加わるという重大な変化が生じているということである。また第二は，この変化が，брат と сестра からの派生語に過ぎない братишка と сестрёнка が愛称や卑称ではなく「年少の」という意味を含む口語の常用語となったことの反射的効果としてもたらされたものであることである。そして第三は，братишка と сестрёнка においても全ての形態素がロシア語起源であって極めてありふれたものであり，ここでも形式面に異言語的要素は一切現れないということである。

Черных 氏が語ってくれたサマルカンドのロシア語の特徴，つまり現地語リンガフランカからの借用語間投詞 Хай（=Да, Хорошо, Ладно）の頻用と「兄 vs 弟，姉 vs 妹」の区別の発生は，言語接触に起因する言語変化を考えるにあたって，ピジン・クレオール化を経ずとも単一言語話者の母語が周辺の諸言語に似てくることがあり得ること，

---

[19] 但し，ここで言う「全員」は妹もしくは弟（あるいはその両方）がいる者に限ってのことである。

[20] 但し，ウズベク語の ака と опа は自分より年長の人々の名前（имя）の直後に置いて「～さん」に近い敬称として用いられるが，口語ロシア語 брат，сестра はこの用法は持たない。

[21] 辞典に出ている標準ウズベク語とタシケント方言の語彙は異なることがあるので，確認のためタシケントのコーディネーターАхмедов 氏にメールで「タシケントのウズベク人は地元の街中でロシア語を話す際に次のロシア語をそれぞれの右に書いたウズベク語の訳として使っているのですか」と書き брат－ака，братишка－ука，сестра－опа，сестрёнка－сингил を示して尋ねたところ，2019 年 7 月 23 日に「タシケントではお記しになった通りですが，ウズベキスタンの他の州の話し言葉では別の使い方をします（по-другому）」との回答があった。

及びどうしてそうした変化が起こるのかを説明できるプロセスとして重視すべき現象である。

但し，「弟」を братишка，「妹」を сестрёнка と呼ぶことは中央アジアで始まった現象ではなく，ロシアのタタールスタンから多数移住して来たカザンタタール人が持ち込んだ可能性もあることが，2018 年調査時になってはじめて判明したことについてもここで触れなければならない。同年 9 月にウズベキスタンのフェルガナ市でインタビューに応じてくれた，1937 年カザン市生まれで 1960 年以来フェルガナ市内に住む元医師のタタール人女性がはっきりと「当時のタタールスタンでも弟を братишка，妹を сестрёнка と呼んでいた」と証言したのである。ウズベキスタンのカザンタタール人 1 世と 2 世の多くはタタール語をよく保存しているが，前出の Хаматова 氏の言う通りウズベク語とカザンタタール語は相互にかなり通じるので，ウズベキスタンにおけるロシア語-ウズベク語-タジク語間言語接触において重要な「触媒」的役割を果たし，ロシア語リンガフランカの形成に参与した可能性も十分にある。

3-4. ウズベキスタンのロシア語単一話者に見られる上記以外の特徴

ウズベキスタンのロシア語単一話者に見られる特徴が上述のものにとどまるわけはなく，彼らの自発的談話をしばらく注意して聞いてみれば，もちろん音韻面およびシンタクス面においても明らかにロシアのロシア語にはみられない特徴が存在するが，紙数の制約上これらについては別の機会に論ずることにするほかない。ここでは 2 人の若年インフォーマントによる端的な例を示すにとどめる。いずれも質問への答えではなく自発文である。

・1997 年サマルカンド生まれの女子専門高校生（ロシア系）（2014 年 9 月）

Я пи[ʃ́ú] и́-ме́йл.　「私は E メールを書きます。」

このインフォーマントはこの自発文において пишу を完全に пи[ʃ́ú]と発音するのみならず，筆者が口頭で聞かせた他の例文において пиши を пи[ʃ́í]と発音してもそれが誤りだとは言わず，動詞の体の誤りのみを指摘した。

・1996 年タシケント生まれの女子高校生（ベラルーシ系）（2014 年 12 月）

（«на фронте»と«во фронте»のいずれが正しいかという話の文脈で）

У меня отец на фронте <u>когда</u> был, всегда «на фронте» говорят.

「私の父が前線に行っていた<u>時に</u>，いつも人は«на фронте»って言っています。」

ウズベキスタンの現地民族のロシア語では従属接続詞の когда や если を従属節の 1 語目ではなく 2 語目以降に置くことが非常に多いが，このインフォーマントのような

若い層のロシア語単一話者にもこの傾向が顕著に見られる。

4. 結び

現在のウズベキスタンではロシア人をはじめとするロシア語単一話者が顕著に減少しているが，彼らの子供たちは依然としてロシア語で教える学校へ通い，その大部分は多言語社会に暮らしながらもロシア語しか話さない。それにもかかわらず同国のロシア語単一話者のロシア語は，話者が若ければ若いほど，地元民族の人々が現地語訛りとヨーロッパロシアのロシア語にない独特の統語規則を伴って話すロシア語リンガフランカに似てくる。なぜなら，現在の学校ではロシア語単一話者の子供たちもロシア語単一話者と話すより現地民族の友達と話すことの方がはるかに多いからである。このようにして言語接触はロシア語単一話者の母語にも影響を与える。しかし彼らの母語は直接的に地元民族の言語自体に似てくるのではなく，地元民族の人々の話すロシア語リンガフランカに似てくるのであり，それに特有の文法的要素やそれを話す人々の音声面での現地語訛りもまたロシア語単一話者のロシア語に伝染するのである。

「言語同盟」との関連で言えば，ある多言語地域のリンガフランカが単に不完全に習得された旧権威語であろうと，また一旦ピジン化とクレオール化を経た言語であろうと,「言語同盟」の形成にあたってリンガフランカがこのように重要かつ決定的な役割を演じると考えれば，系統的に異なり相互に通じない諸言語であっても隣接していると互いに似てくるというこの「言語同盟」なる現象は，奇妙なことでも不可解なことでもないと考えることが可能となるのである。[22]

ОБ ИЗМЕНЕНИИ ЯЗЫКА ПОД ВЛИЯНИЕМ ЛИНГВА-ФРАНКА НА РОДНОЙ ЯЗЫК ОДНОЯЗЫЧНЫХ ЛЮДЕЙ

[22] 本稿は, 平成 28 年度～平成 31 年度科研費補助金（基盤研究(B)(海外), 研究代表者柳田賢二, 研究分担者 3 名，課題番号 16H05657）「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」ほか数件の科研費による現地研究で得られた知見を基に執筆した。

ЯНАГИДА Кэндзи

Многие жители в Средней Азии билингвы, а языковые репертуары у людей различных национальностей в разных регионах в Средней Азии весьма разные. Билингвы там являются людьми, переключающимися между 2 или больше языковыми кодами в повседневной жизни. Такие люди, однако, далеко не на каждом языке говорят так же, как следует по правилу. Таким людям нужен лингва-франка, т.е. язык с пластичными законами, широко- и обще- употребляемый людьми, родные языки которых очень разные. Как лингва-франка в многоязычном обществе могут служить не только креол, но и бывший авторитетный язык, выученный последующими поколениями хоть и недостаточно. Хотя способности устного изложения и понимания на лингва-франка у разных людей могут быть весьма разными, он входит в состав их языкового репертуара. Для них лингва-франка – не чужой язык. С другой стороны, в одной местности может быть два или больше лингва-франка. В Ташкенте лингва-франка являются узбекский и русский язык, а в Самарканде – таджикский и русский язык.

Из Узбекистана уехали многие русскоязычные люди после распада Советского Союза, но еще живут там небольшая часть их, и большинство одноязычные. В устном языке русскоязычных людей теперь наблюдаются особенности, которых не было в русском языке в России. Так, сегодня и в Ташкенте, и в Самарканде русскоязычные люди различают старшего/-шую и младшего/-шую брата/сестру по словам, и как будто по норме зовут младшего брата «братишка», а младшую сестру «сестрёнка», вследствие чего слова «брат» и «сестра» употребляются так же, как японские слова «ани» (старший брат) и «анэ» (старшая сестра). И еще, в Самарканде русскоязычные люди говорят «Хай» со значением «Да/Хорошо/Ладно». Такие явления легко можно объяснить. Во-первых, русскоязычные люди в Узбекистане, хотя и говоря только по-русски, чаще и больше разговаривают с людьми местных национальностей, говорящими на русском лингва-франка, в родных языках которых старший/-шая и младший/-шая брат/сестра обязательно различаются по словам. Во-вторых, в Самарканде местные люди говорят на таджикском лингва-франка, в котором значение «Да/Хорошо/Ладно» выражается словом «Хай».

Русский язык в Узбекистане теперь находится в процессе быстрого сближения к русскому лингва-франка местных народов. Несмотря на то, что русские, узбеки и

таджики совсем не понимают друг друга, когда они говорят только на своих языках, такие «местные» языки, включая и «местный» русский язык, становятся похожими друг на друга. При таких условиях становится возможным «Языковой союз».